

## 「ロータリーこの素晴らしいきもの」—ロータリー運動の国際性—

ご紹介いただきました深川でございます。「ロータリーこの素晴らしいきもの」—ロータリー運動の国際性—というテーマをいただいております。テーマの性質上、若干固い話になるかもしれませんが、お聞き苦しい点がございましたら、お許しをいただきたいと思っております。

まず、この「ロータリー運動の国際性」というものを考えるにつきましては、ロータリー思想の潮流として三つの流れがあるということをお考えお聞きいただかないと思っております。

第一は、「国際奉仕とはそもそも何ぞや」という国際奉仕そのものの思考の流れであります。第二は、国際奉仕とは若干原理的に異なったものとして、ロータリー財団というものがございまして、このロータリー財団についての思考の流れであります。そして第三は、国際奉仕とは全く原理的に視点の異なる世界社会奉仕(WCS)の思考の流れであります。大きく分けまして、この三つの潮流があるだろうと思っております。

### 国際奉仕について

まず、国際奉仕の問題は1648年にウェストファリア条約によって近代国家が成立しましたが、この国家の存在を前提とした国際間、国家と国家のあいだの調整の問題が、まさに国際奉仕の問題なのでありますが、これに対して、世界社会奉仕(WCS)というのは、地球というものを一つの地域社会と考えようという考えであります。したがって、国際奉仕は、国家間、国家と国家とのあいだの利害の調整の問題であります。世界社会奉仕というのは、全く概念の立て方の理由が違うわけでありまして、この点を混同しますと、国際奉仕と世界社会奉仕とは、どこが違うのかということが分からなくなるだろうと思っております。

まず、国際奉仕そのものの問題について話を進めていきたいと思っております。ロータリー運動と申しますものは、当初は地域社会のことだけを考慮しておりました。したがって、ロータリークラブの活動というものは、ロータリークラブのテリトリーから外へ出ることはほとんどございませんでした。ところが、第一次世界大戦を契機にいたしまして、ロータリー運動というものは、国際的な視野を持つに至るわけでありまして、第一次大戦は、1914年に始まり、アメリカがその大戦に参加をしたのが1917年、そしてその翌年の1918年には、もう終戦を迎えております。ところが、イギリスのロータリークラブ群というものは、最初に1911年にアイルランドのダブリンにロータリークラブが設立され、そしてエジンバラ、グラスゴー、そしてロンドンに設立されました。つぎつぎにロータリークラブが設

立されて、そのロータリークラブ及びロータリアンたちが、すでに第一次世界大戦と関係を持つようになっていたわけでありまして、

第一次世界大戦というのは国家と国家の争いでありまして、ところが、ロータリーというのは何かと言いますと、国家と国家ではなくて、個人と個人とを善意で結んでいく運動でございまして、したがって、機能する場面が国家と個人とは違うのであります。個人はそれぞれ国籍というものを持っております。したがって、徴兵制度によって武器を持って戦わなければならない。そうすると、アメリカ人とドイツ人が武器を持って殺し合いをすることになる。そのことをもって、正義の実現と考えることが出来るのかという問題が出てまいります。したがって、個人の善意というものを提唱していく問題と、国家と国家の利害が対立する問題とが交錯しますと、ロータリアンの友情というものは大変複雑な判断を強いられることになるわけでありまして、

一つのエピソードが残っております。第二次大戦の直前、日本とアメリカとの関係が険悪になって戦争が



始まりそうになっていました。アメリカにはロータリーの始祖であるポール・ハリスがいる。ひとつポール・ハリスにこの難局をなんとかしてもらおうではないかと言って、日本のロータリアンがポール・ハリスに対して直訴に及んだことがございまして、ポール・ハリスはそれに対して、「ロータリーは国家と国家の争いには関心を持つことは出来ない」と言って渋い顔をしたというエピソードがあるのであります。そのように、ロータリアン同志の友情というものが、戦争が始まると、大変複雑な判断を強いられることになるのは明らかであります。そこで、戦争の勃発に対して、ロータリークラブというものはどういう関係を持つてばいいのかという問題でございまして、端的に申し上げまして、戦争が勃発すると、ロータリークラブはそれに賛成したらいいのか、あるいは反対したらいいのかという問題でございまして、これは結論としては全く関係がないと言い切らなければならない。その根拠は何かと言いますと、標準ロータリークラブ定款第11条に「政治禁」の規定があります。ロータリークラブと申しますものは、「一切の公共問題から中立でなければならぬ」ということになりまして、戦争が始まってもロータリークラブとしては、それに対して意見を述べることは出来ないものであります。では、個々のロータリアンはどうなるのか。ロータリアンは政治的なイデオロギーから全く自由でございまして、戦争に対して賛成するロータリアンがあってもいいし、戦争に反対するロータリアンがあってもよろしい。条件付きで賛成する人も条件付きで反対する人も結構であります。このようないろいろの立場をとることは、ロータリアンにとっては憲法が保証しております良心の自由の問題に属することでございますから、ロータリアンは政治禁に対して関係がないと考えておけばよろしかろうと思っております。

ただ、戦争がとにかく起こってしまった、賛成もある、反対もある。「俺はこの戦争に反対だから一切協力はしないよ。しかし何か奉仕的な仕事はしよう」という人も出てくるかも知れない。しかし、「俺はこの戦争に賛成だから、敵のロータリアンも殺すよ。そのかわり奉仕のことは一切しないよ」というロータリアンが出てくるかもしれない。しかし、そのように考え

るのはいけないこととございまして、やはりこの戦争の勃発ということは、国家の意思決定上、そういうことになったわけでありまして、戦争の勃発そのものには、ロータリークラブは何も関係はないのであります。戦争という一つの異常状態が起こった以上、その異常状態を奉仕の実践の場として考えなければいけないという考え方が出てくるわけでありまして、ロータリアンは、ロータリークラブの例会を出た瞬間から、ありとあらゆる社会状況を奉仕の実践の場と考えなければならない。そういう考え方からいいますと、その社会状況の中には、正常な社会状況もあれば、戦争とか飢饉とかいう異常な社会状況もあるわけでありまして、異常な社会状況が起こったら起こったで、それを奉仕の実践の場として考えていかなければならない。こういう考え方が、国際奉仕というものの実践に、ごく自然にロータリアンが入っていくことが出来た大きな原因であったと理解すればよろしかろうと思っております。

戦争の勃発には、ロータリアンは直接の責任はございません。しかし、戦争という異常な状態が起こった以上、それを奉仕の実践の場と考えるということになるわけでありまして、それでは第一次世界大戦当時、アメリカのロータリアンたちはどういうことをしていたのかということでありまして、ロータリー運動と申しますものは、この戦争という社会の異常状態の中で、一人ひとりの善意の支配していく分野を確立していこうというので、大変熱のこもった運動をしております。

まず第一に、出征軍人の慰問激励であります。これはアメリカのみならずイギリスのロータリアンもしていたはずであります。

それから第二に人種差別の排除の問題であります。これは村八分をしないようにしよう。例えば、アメリカのロータリアンは、ドイツ系アメリカ人に対して村八分をしてはならない、という反村八分運動というものをやっております。第一次世界大戦のときには、このドイツ系アメリカ人に対する反村八分運動が大変効果を上げたのでありますけれども、第二次世界大戦のときは、悲しいかな、ロータリーの実践意識が落ちていたのか、反村八分運動はあまり効果は上げておりません。それどころか、日系アメリカ人に対して大変な

迫害を行ったことは皆さん周知のところであり、1991年になって初めて日系のアメリカ人の財産に対する賠償決定をしたということがニュースで報じられています。日系一世の土地の所有権を認めたのは1952年、戦争が済んで7年も経ってからのことであり、そういうことがございましたから、それまでは日系のアメリカ人は大変な怨念を持ってこの世の中を過ごしていたということが言えるわけであり、

しかし、アメリカという国は大変フェアな国でありまして、1983年に日系人の戦時収容に関する委員会というものを開きまして、強制収容をされておりました日系アメリカ人に対して賠償の措置をとっております。一人2万ドル、合計15億ドルの保障を決定しております。そして、対日系人に対する処遇の歴史をアメリカの国民に教育をしなければならない、そのための基金も設定しております。そして、最後に、アメリカの国家として正式に、この日系アメリカ人に謝罪を行うという決定もしております。

こういうことがございますから、戦争が勃発しますと、やはり、その国における人種差別運動というのは、かなりどこの国でもやっていたように思われるわけであり、しかし、第一次世界大戦のときには、それを止めようと言って、アメリカのロータリアンたちが立ち上がったということが記録に残っております。

それから第三には傷病兵の慰問激励であります。傷ついた兵士たちを慰問激励する、これは主としてイギリスのロータリアンが実践していたと思うのであります。ドイツとイギリスとは戦線が近うございますから、傷ついたイギリスやアメリカの将兵たちを慰問激励をしたのであります。大体、以上のようなことをロータリアンたちはしていたわけであり、

この第一次世界大戦につきまして、その当時のロータリアンが一つ疑問に思っていたことがあります。それはロータリアンクラブのテリトリーとの関係であり、ロータリアンクラブのテリトリーは、一つのクラブの活動限界の意味を持つわけであり、しかし、個人としては、どこでも奉仕の実践が出来るわけであり、そのクラブのテリトリーの中でしかロータリアンは個人奉仕が出来ないなどということはないの

であります。例えば、私がロンドンの街角を歩いているとき、タバコの吸い殻が落ちていた。「ああ、これは汚いから、拾ってきれいにしよう」、これは、まことにささやかではあります、社会奉仕の実践であります。ところが、「ここはロンドンである。俺のテリトリーの外だから、タバコの吸い殻を捨てるのは止めよう」などという馬鹿なことではないわけであり、どこでもロータリアンの現在地が奉仕の実践の場であり、これが個人奉仕の特色であります。

しかし、団体奉仕は、クラブとして何かをするときはクラブのテリトリーの中でしか活動が出来ないという制約が一つあります。したがって、テリトリーというのはロータリアンクラブの活動限界を画することにはなりませんけれども、ロータリアン個人の活動限界とは全く関係のないことなのであります。

ところが、当時のロータリアンは、このクラブの活動限界と個人の活動限界というものを混同していたふしがあるのであります。どういうことかと言いますと、第一次世界大戦で傷病兵の慰問激励をする、あるいは、ドイツの戦線に行き援助をしなければならない、そういうことになり、アメリカのロータリアンにとっては、アメリカから遙か彼方の遠い外国で奉仕の実践の効果が上がることになる。「これはテリトリーの外だ」ということになる。勿論個人奉仕であればそれでよいのでありますけれども、当時のロータリアンは、クラブの活動限界と個人の活動限界との区別が出来ておりませんから、テリトリーの外でこのような奉仕の実践をして、はたしていいのだろうかという疑問が頭の中にあつたわけであり、

そこで1919年、世界大戦が終わった直後のソルトレイクシティの国際大会で、こういうテリトリーの遙か彼方で効果の上がる奉仕の実践というものを、ロータリアンの正当な奉仕、即ち国際奉仕として確認しようという決議を取り付けたわけであり、これがロータリアンの世界に国際奉仕という概念が生まれてきた最初の物語であつたわけであり、

この1919年のソルトレイクシティの大会決議というものは、戦争が起こると国際奉仕の実践の機会が与えられる、これをロータリアンの正当な奉仕の類型として認めようという考え方であり、そこで、戦争が

起こらなければ国際奉仕の実践は始まらないのかという原理的な反省が起こってまいります。社会の異常状態には、戦争以外にも貧困の問題があります。それから災害が起こります。これも社会の異常状態の一つであります。戦争を含めて、さまざまな異常状態を個人の善意をもって少しずつ消していくという作業、これをロータリアンの奉仕の実践というのであります。そうだとすれば、戦争があろうとなかろうと国際奉仕の実践はありうるのではないか、個人の善意の支配する分野を少しずつ広げていくというロータリアン運動の立場からすると、戦争があるかないかということは全く付随的な事柄ではないのか。このように考えると、一体国際奉仕の本質は何なのかを考えなければならない。そこで、当時のロータリアンは沈黙考したわけであり、

国を超えた良質な人一人ひとりが善意と善意を繋いでいく、まず最初はロータリアン相互の善意と善意を繋ぐ。そしてその次には、ロータリアンの周辺相互の人たちの善意と善意を繋いでいく、例えば会社関係の人たちとか下請関係、同業者関係、そして地域社会の関係あるいは国際社会の関係という形で善意を繋いでいく。そのようなロータリアン運動の過程で国際的な意見の対立について共通な理解を作り上げていくということが出来れば、そしてまた、国籍とか文化伝統、あるいは皮膚の色、黒いとか白いとか黄色いとかいろいろありますが、そういう皮膚の色が変わり、文化伝統が異なっても、我々の身体に流れている血は共通に赤いということの認識を作り上げていく、そういうことが出来れば、ロータリアンは、戦争というものを予防出来ると考えたわけであり、

果たしてそうなのか。問題はそう簡単ではございません。なぜかと言いますと、これには国家というものをごくどのように考えるか、ロータリアンの国家観というものに関連してきます。ロータリアンの根本原理は、一業一会員制、即ち一つの職種から一人だけ会員を選ぶという制度であり、この一業一会員制をもって選ばれた良質な職業人が、心と心を通わせる、個人と個人が心と心を通わせていく、これをロータリアンは善意と呼ぶわけであり、これがロータリアンにおける奉仕の原型パターンであり、この善意の支配する

分野を少しずつ広げていく。最初は会社の中で従業員とか、お得意さんに広げていく、あるいは下請の関係で、この善意を広げていく、同業関係に広げていく、あるいは売主と買主の関係に広げていく、そして私たちの家庭生活万般にこの善意を広げていく、そして地域社会に広げていく、そして国際社会にそれを広げていく、こういう形で善意というものを全世界に広げていかなければならない。国際社会の場合は、まず一人ひとりのロータリアンが、善意を持って外国の人たちに働きかける。このようにしてロータリアンは、全ての人間が善意によって結び付けられると、戦争は起こらなまいと考えたのであります。これは国家というものを国民の総体であると考えれば、正しい考え方だと言えるのであります。家庭とか地域社会、国家社会、皆人間の集まりであります。したがって全世界の職業人が手に手つないで、親睦を通じて国際的な理解と親善と平和の確立に寄与していく、そうすれば世界平和が樹立出来るのではないかとロータリアンは考えたのであります。

しかし、これは優れてアメリカ的な考え方なのであります。法律の世界で言えば、優れて英米法的なものの考え方なのであります。何故かと言いますと、英米法の考え方、アメリカ的な考え方では、人間が1億集まればそれが国家だと言うのであります、しかし人間が1億集まっただけでは、それは鳥合の衆に過ぎません。そういう人間の集団に対して、統治権その他いんな文化価値、即ちプラスアルファがあつて初めて1億人の人間の集団というものが統一体になるわけであり、人間の集団プラスアルファ、これが国家の要素であるというのが、ヨーロッパ大陸法の考え方、日本の伝統的な国家論なのであります。したがって、国家が成立するためには、一定の領土、クラブで言えばテリトリーであります。領土があつて、その上に国民が存在する、そしてプラスアルファとして主権、統治権その他の文化価値があつて初めて国家というものは成立するということになるわけであり、

ところが、アメリカ的な考え方では、1億人の人間が集まれば、即ちそれが国家だというのであります。

そうすると、ヨーロッパ大陸法で言っておるプラスアルファというのは、アメリカ法では一体どこにある

のかという問題が出てまいります。宗教改革のマルティン・ルッターが新教運動を興しましたが、この新教運動の一番最後に、スイスのジュネーブで起こった思想にカルビンの思想があります。カルビンの考え方は、このようなアメリカ的な考え方を集約いたしまして、国家の要素であるプラスアルファというのは、国民一人ひとりの心の中に宿るのである。したがって国家というものは、一人ひとりの国民のことであるという立場をとるのであります。これは、ヨーロッパ大陸法の考え方とは基本的なものの考え方が全く異なるのであります。プラスアルファは国民一人ひとりの心の中に宿る、即ち国家というものは一人ひとりの国民のことであるという考え方でありす。

実は、この考え方はロータリーの奉仕哲学の中に移し植えられております。1960年から61年にかけての国際ロータリーの会長、エド・マクローリンが有名なターゲットを打ち上げました「You are Rotary—あなたがロータリーですよ、あなたはロータリーですよ、というターゲットであります。これはロータリーというのは、ロータリークラブのことでもない、国際ロータリーのこともない、一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーですよという提唱であります。これは、国家とは一人ひとりの国民のことである。国家というものは一人ひとりの国民の心の中に宿るものであるというカルビンの提唱と全く同じ提唱をしておるわけでありす。カルビンの提唱はまさにロータリーの考え方と全く機を一にするものであるというのであります。

このプラスアルファの内容を少し比喩的に表現してみたいというのであります。アメリカのタバコでチェスターフィールドというタバコがあります。これは、実はある州では65セントで売られております。しかし隣の州に行きますと、それは30セントで売っているのであります。35セントの差があります、同じチェスターフィールドというタバコであって、値段がそれだけ違う。どうして違うのか。これは製造原価はどちらも25セントで同じであります、税金が違うのであります。ある州では、25セントの製造原価に対して40セントの税金がかかります、合計65セントであります。隣の州では25セントの製造原価に対して、わずか5セ

ントしか税金を取っていない。したがって、片や65セント、片や30セント、非常に値段に開きがあります。私ども日本人であれば、こういう場合には、例えば兵庫県で65セント、隣の大阪府へ行ったら30セントということになれば、車に乗ってタバコを買い出しに行くだろうと思うのであります。しかしアメリカの国民はそれをしないのであります。何故だと聞いてみましたら、「我々は隣の州よりも8倍も高い、40セントの高い税金を払ってる。だからこそこの素晴らしい我々の地域社会がある。したがって、自分たちの地域社会というものを守るためには、やはり隣の州は非常に安くても、そのタバコを買うわけにはいかない」と言って毅然として主張するわけでありす。その心というのが、やはり国家の成立要素の一つとしてのプラスアルファの一つの内容であろうかと思うのであります。国民一人ひとりの中に国家は宿る、その国民一人ひとりの中にそういう心がなければ国家というものは崩壊していってしまうのであります。そういうことをカルビンは主張しているわけでありす。

したがって、ロータリー的な感覚で国家というものを考えるときには、そのように国家というものは一人ひとりの国民の心の中に宿るものだ、そういうふうに理解をすればよろしかろうと思うのであります。

このようにいたしまして、ロータリーの考え方というものは、まずロータリアンがリーダーシップを取って、地球上のすべての人たちを善意と善意をもって繋いでいく運動、これがロータリー運動であるという立場を取ります。そして、この本願に則って国際奉仕の概念をもう一度作り直そうじゃないかという因縁が熟してまいりました。時に1921年であります。ソルトレイクシティーの大会決議がなされたのが、そのちょうど2年前の1919年でありますから、2年間の反省期間を置いて、この因縁が熟したと言っているのだと思うのであります。

そして、どのような概念を打ち立てたのかと申しますと、戦争があろうとなかろうと、一人ひとりのロータリアンがロータリーの例会で得た「人と人とを善意で結ぶ」という考え方、そういう考え方をもって国際社会のすべての人たちとお付き合いをしたときに、ロータリー運動にもし力があれば国際的な理解と親善

と平和を確立することが出来るだろうと。このように考えていきますと、先ほどの1919年のソルトレイクシティーの大会決議はまことに現象的であって、次元が低いということが分かるわけでありす。戦争に関係なく、ロータリアン一人ひとりの心を良質化していくという作業、これが国際的に進められた場合には、戦争の防止と世界人類の恒久的平和という大眼目が達成されるだろう、そういう自覚が生まれてまいりまして、このことが1921年のエジンバラの国際大会の決議によって正式な文章になるに至ったわけでありす。

そしてその文章というのは、そのままの形で標準ロータリークラブ定款第3条のロータリーの綱領の第4のところのところに記されることになったのであります。「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること」。この決議がまさに初期のロータリーの原理の集大成のハイライトの一つとして宣言せられるに至った、これが今日の国際奉仕の意味するすべてのものであるということを理解しておかなければならないと思うのであります。

1908年にシカゴのロータリークラブに入会いたしましたアーサー・フレデリック・シェルドンという経営哲学者がいます。彼は、人間というものは、個体としては一人ひとりバラバラだが、見る目をもってすれば、そのバラバラの人間は皆目に見えない紐(solidarity)によって繋がれているという考え方を披瀝いたしまして、人類連帯の自覚が大切だということを主張したのであります。このシェルドンの考え方が今日の国際奉仕の根底に流れる思想であると言い切つてよろしかろうと思うのであります。

今、綱領の第4の説明を致しました。この綱領というのは、ロータリアンにとっては最も大事なものであります。したがって、その原理的な側面を若干説明をしておきたいと思うのであります。

綱領は、まさにロータリアンにとって片時も忘れてはならないものであります。いつも心の中に綱領というものを据えておかなければならない。そうでなければロータリアンとは言えない、と私は思うのであります。したがって、新しい会員さんをクラブにお迎えするとき、会長さん、幹事さん、並びにクラブの情報委

員長さんは、新しい会員さんに綱領とはいったい何ぞやということ十分に教え込んでおくべき必要がございます。それから、この綱領と共に、もう一つ大事な規定があります。それは標準ロータリークラブ定款第13条であります。どういうことが書いてあるのかと言いますと、「会員は、入会金と会費を支払うことによって、綱領の中に示されたロータリーの原則を受諾し、本クラブの定款・細則に従い、その規定を遵守し、これに拘束されることを受諾するものとする。そして、これらの条件の下においてのみ、会員は本クラブの特典を受けることができる」ということが書いてあります。したがって、標準クラブ定款第13条というのは、これまた会長さん、幹事さん、並びにクラブの情報委員長さんが新しい会員さんに周知徹底をしておくべき条文なのであります。

ところが、今日綱領を知らないロータリアンが増えているということを耳にいたします。これはロータリーの危機であります。前年度のR I会長のラビッツァ会長が、ロータリーに魅力がなくなったためにロータリーの会員が減少していると嘆いておられました、その大きな原因の一つに、綱領を知らないロータリアンが増えてきたということがあると思うのであります。綱領というものが本当に身に付いておれば、ロータリーを退会するなどということはあり得ないことであります。昔は、一旦ロータリーに入った人は、まずロータリーをやめることはなかったのであります。今は、ロータリーに入っても簡単に退会していきます。それはロータリーの勉強をしなくなったということも一つの原因でありましよう。それよりも、ロータリーの勉強をしないがために、ロータリーがこんなに素晴らしいものだというロータリーの本当の魅力が分からないままにロータリーを去って行く人が増えておるということでありす。その意味でも、会長さん、幹事さん、並びに情報委員長さんは、ぜひともロータリーの核にあるこの綱領というものを皆さんに周知徹底するような努力をしていただきたいと思うのであります。

綱領の説明をしておきます。これは国際奉仕の原理的側面を理解するためには大変重要なことなのであります。

ロータリーの綱領は、本文には、『ロータリー運動とは、企業の根底に奉仕を置くべしとする理想を追究することを目的とするクラブ活動である』という意味のことが書いてあります。『企業の根底に奉仕を置く』というところが大変大事なところでもあります。資本主義経済社会では、企業の根底には儲けがあるわけであり、企業は儲けなくして生きていくことは出来ません。したがって、企業の根底には儲けがあるはずであります。しかし、ロータリーはそれにもかかわらず、『企業の根底に奉仕を置く』と言い切るのであります。ではロータリーは、儲けというものを否定するのかということ、否定はしないのであります。一つ例を挙げておきます。例えば、ある商人が100円でものを仕入れてきて、それを100万円で売ったとします。売れる売れないは別にしまして、とにかく売れたとします。商人はボロ儲けであります。大変幸せになります。しかし、その一方、それを買わされたお客様のほうは、限りなく不幸になります。実は、ロータリーはその種類の儲けを儲けとは言わないのであります。これは暴利の問題でありまして、そんなものをロータリーは儲けとは言わない。ロータリーの言う儲けとは何かと言いますと、商人もその商品を適正な値段で売って幸せになる、お客様のほうも、その商品を適正な値段で買い取って、それを所有することによって幸せになる。商人もお客様も双方が幸せになる、その調和点がどこにあるはずである。その調和を求めているのがロータリーの奉仕だと考えるわけであります。この考え方がどこに出てくるかと言いますと、1923年のセントルイスの国際大会で採択されました決議23-34号という有名なドキュメントがありますが、その第1項冒頭のところに、その説明が出てまいります。即ち、第1項に「ロータリーとは」という定義がありますが、その定義に曰く、『ロータリーとは、利己と利他との調和を目的とする人生の哲学である』と言い切っているのであります。したがって、綱領の本文にある『企業の根底に奉仕を置く』という考え方、これは決議23-34号の冒頭に出てくるわけであります。『利己と利他との調和を目的とする人生の哲学』、全く同じことを言っておるわけであります。

ところで、この本文だけでは非常に抽象的で分かり

難いので、それを補強するために補強原則（綱領の構成要素）とも言えるべきものを4つ例を挙げて説明しております。

ロータリーは、クラブの例会を中心に考えます。クラブの例会を中心に考えて、クラブの内側と外側の二つに分けて考えるわけであります。

ロータリークラブの内側は何をすることか。これは一業一会員制で選ばれたロータリアンが奉仕の心を作る、即ち、自己研鑽であります。自己研鑽に励むことによって奉仕の心を作る、これがクラブの内側の仕事。そして、一歩クラブの外に出ると、その作られた奉仕の心を外界のあらゆる事象に適用していく、これが奉仕の実践であります。奉仕の心は内で作り、一歩外へ出ると奉仕の実践がある、こういう考え方をロータリーは採るわけであります。

そこで、この内側で奉仕の心を作るというのでありますが、いったい、どのようにして、その奉仕の心を作るのかと言いますと、綱領の第1に曰く『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』、毎週1回の例会に出て来て、そして良質な人たちと心の友になる。そして親睦のうちに相和していく、そのこと自体が、世のため人のための奉仕エネルギーの源泉になっていくというのであります。これが綱領の第1であります。『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』これは心を作る規定であります。

次に、綱領の第2は、作られる奉仕の心の内容を規定しております。これは3つに分かれます。私はいつも第3番目から解説をしております。第3番目には何が書いてあるかと言いますと、自分の職業というものを天職（神様から与えられた職業、英語では calling）と心得るべきこと、これが綱領の2の3のところに規定されております。神様から与えられた職業、これを vocation と言います。ロータリーで vocational service と言っているのはこのことなのであります。職業を天職と心得る。その次に、第2番目に、天職が集まってロータリークラブを作っておるわけありますから、例えば、50人のロータリークラブがあれば50通りの天職があります。天職と天職との間には上下の差があるわけはございません。すべて平等対等な神様から与えられた天職であります。大企業の経営者も中小企業の

経営者も同じく天職であります。どのような職種の経営者も、お互いに平等対等な天職を持っておる、そういう自覚を深めなければならない。したがって、第2番目は、職業に貴賤なしとの自覚を深めるべきこと、ということになります。そして最後に第1番目に戻りまして、そのような職業であるから、ロータリアンである以上は、職業の倫理的基準を高めていかなければならない、という形になっております。したがって、綱領の第2は、どのような心を作るのか、即ち心の内容を規定しております。したがって、綱領の第1が奉仕の心を作る規定、そして、綱領の第2が奉仕の心の内容の規定となるのであります。

ここまでは奉仕の心を作る段階であります。そこで、綱領の第3、作られた心は今度はクラブの外へ適用しなければならない。これが、奉仕の心の適用、即ち奉仕の実践であります。では、一体どこに適用するのかという問題であります。

まず第一に、私たちの家庭生活にその奉仕の心を適用しなければならない。手続要覧では、これを個人生活と訳していますが、実は、英語の原文は personal life となっております。personal というのは血の通った関係のことを意味します。したがって、単に個人生活というよりも家庭生活と訳すほうが正しいだろうと思うのであります。次に第2に職業生活に奉仕の心を適用（実践）しなければならない。business life であります。そして第3番目に社会生活、community life に奉仕の心を適用しなければならない。この community life の中には、地域社会 local community と国際社会 international community との2つの種類があります。

このように見てまいりますと、まず最初に奉仕の心を作る、そして作られた心の適用（実践）の問題という形になってまいりますから、奉仕クラブの綱領というものはサンドイッチ型をしております。サンドイッチの一番上に乗っかっているパンが、心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと、即ち親睦の規定、その下のサンドイッチの具にあたるのが、どのような心を作るのか、即ち心の内容の規定であります。そして下のパンは、どこへその心を適用するのか、即ち実践の規定であります。

奉仕クラブの綱領というものは、これで原理的に

は、完成しておるわけであり、ところが、ロータリーの綱領は、さらに、下のパンをもう一枚くっつけております。それはどういうことかと言いますと、1921年のエジンバラの国際大会で採択された、国際奉仕の概念規定がありますが、それをそのままの文章で、綱領の第4のところを持ってきております。したがって、実践のパンが2枚になっているのであります。国際奉仕は、既に第3の社会生活の中に含まれています。この点がロータリーの綱領が若干原理の形に合わないということになってくるわけであり、しかし、ロータリー運動の国際性ということの重要性を考えますと、これはダブって規定してでも、それを強調すべき価値があるということを言わなければならないだろうと思うのであります。

従来、この綱領については、何回も規定審議会に改正の提案がありましたが、綱領は完成体であるが故に、未だに改正されたことはございません。今後もおそらく改正されることは、まずないと思われ、どこか一つを変更しますと、全体を組み替えなければならないという形になってくるわけであり、このようにロータリーの綱領というのは、完成体 perfect なものでありまして、簡単に改正出来るものではないのであります。このように、国際奉仕というものは、ロータリーの綱領の中で非常に重要な位置を占めているのであります。

それから綱領については、もう一点注意すべき点があります。それは、作られた奉仕の心を一体どこに適用するのかという問題で、先ほど、家庭生活、職業生活、そして社会生活に適用すると申し上げました。そして、その社会生活の中には、地域社会生活と国際社会生活があるということも申し上げました。ところが、地域社会と国際社会の間にもう一つ国家社会というものがある筈なのであります。実は、ロータリーというものは international なものでありますから、この国家社会に対する奉仕の概念を持っていないのであります。地域社会の延長線上には、国家社会を通り越して国際社会があるという形になっております。したがって、ロータリアンは、よく「どこの国へ行く」と言うよりも、「第何地区に行くよ」と地区で言ったりします。これは敢えて国家というものを意識せずに、

まずクラブがある、そしてクラブを取り巻く地域社会がある、その延長線上に国際社会があるという考え方があります。ロータリーが、国家社会に対する奉仕という概念を持っていないというところが、日本のロータリーが戦時中、軍閥の弾圧を受ける一つの理由になったことも明らかなことでもあります。以上を要するに、国際奉仕は、綱領の中では大変大きな要素であると思うのであります。

綱領の話が長くなりましたが、ロータリー運動の国際性を理解するにつくまして、補足的に、一体、国際理解とは何なのかということも申し上げておかなければならないと思います。国際理解の理解というのは、辞書を引きますと、understand というのでありますが、この言葉は stand under から来ていると言われております。したがって、国際理解というのは、国際的に理解されていることであります。国際的に理解されていることと言っても、自然界についての理解は、国際的に殆ど誤解はございません。気温が低くなって雪が降ったり、雨が降ったりする、そういうことについては万国共通であります。自然についての理解は国際的に誤解はございません。しかし、人間についての理解とか、人間が集まっている社会についての理解になりますと、国際理解は非常に大きな差が出てまいります。

まず『人間の理解』、これは同じ国の人でも、人によってずいぶん理解の仕方が違うことがあります。したがって、人を理解するというのは大変難しいことでもあります。ロータリーではよく「思いやり」ということが言われます。それから「相手の立場に立ってものを考える」ということもよく言われます。しかし、よく考えてみますと、相手の立場に立ってものを考えるということは、自分の従来の考え方を潰してしまうことを意味するわけでもあります。したがって、相手に対する思いやりなしには人間の理解というものはあり得ないこととなります。

それから、この人間が集まって作り上げている『社会の理解』になりますと、いっそうこの難しさが顕著になってまいります。山本七平という有名な評論家がいらっしゃいますが、あの方がイスラム教の社会と日本の社会とを比較しておられます。イスラム教の社会

は原理社会だと言われており、日本の社会は状況論理の社会だと言われている。日本の社会は原理が全然ないわけではないけれども、その状況によって判断する社会であります。イスラム教の社会は、具体的な例を挙げますと、例えば、決まった時間になるとイスラム教社会はお祈りをする時間がございまして。仕事の途中でもお祈りをする時間になると、仕事を放っておいても、とにかくお祈りをしなければならない。また、ある月のある日には一切取引をしない、という取り決めもあります。とにかく色々な取り決めがあって、それが厳格に守られていく社会であります。例えば、日本人が、明日は日本へ帰らなければならない、最後に美術館を見ていこうというので、美術館へ入って、切符を買おうとすると、「今日は取引をしない日だから、美術館の切符を売ることは出来ません」と言われる。しかし、「他の人は皆美術館へ入って見ているではないか」「いや、あれは昨日切符を買った人だ」と言っていて、今日は切符を売らないのであります。日本人であれば、状況論理の社会でありますから、「あなたは、明日は日本へ帰る。それは気の毒だ。では、あなただけ特別に1枚だけ切符をおわけしますよ」と言っていて切符を売ります。ところが、そういうことをイスラムの社会ですと処罰されます。しかし、日本の社会であれば、そのことによって、「あの男は融通のきく男だ」ということになってくる。この点が社会によって理解の仕方が違うわけでありまして。私が友人に聞いた話であります。イスラム社会で、広い砂漠の一本道を自動車で行くことになった。運転手がついてくれて走りだしたが、時速40kmでノロノロ走るのであります。我々日本人であれば、まっすぐの一本道で対向車も何もなければ、時速100kmぐらいでブツ飛ばすであろうと思うのであります。彼等は絶対それをしない、それをするとは処罰されますから、時速40kmで走ります。しかし、それを守っておる限りは、彼等は安全なのであります。したがって、日本人の考え方とは、基本的な違いがございまして。やはり社会が変わりますと、色々難しい問題が出てまいります。国際理解ということをお考えするときには、非常に断層が深いということをお申し上げなければならない。各々の社会の生い立ちが、各々の社会に特有な形で出来上がっておりま

して、一方は原理社会、そして他方は状況論理の社会。そして一方から他方を理解することは大変難しいということをお言わなければならない。社会全体の相互理解ということになりますと、思いやりがあっても大変難しいということをお言わなければならないのであります。

しかし、このように国際理解というのは大変難しいにもかかわらず、ロータリーはこの非常に難しい国際理解というものを実現すべきことを、ロータリーの綱領に堂々と書いているのであります。まさにロータリーは、理想主義者の集団であると言わなければならない。国際間の理解、親善、平和、それを実現するためには、既成の固定観念、既成の価値観というものを根本的に見直さなければならないと思うのであります。

### R財団について

国際奉仕そのものについてのお話はこれぐらいにして、次は、ロータリー財団の話をしておきたいと思っております。

ロータリー運動は、1919年に国際奉仕の概念を確立していく過程で、国際奉仕の実践のために、原理的に奇妙な運動を始めたのであります。ことの起りは、第一次世界大戦のまっ最中の1917年でありまして、アメリカが参戦した年でありまして、その時のロータリークラブ国際連合会の会長でありましたアーチ・C・クランプという人が、国際理解と親善を目的とする基金の設定を提唱いたしました。これが時移って、1931年にロータリー財団と名称を変更するに至ったのであります。しかし、実体は変わっておりません、名前が変わっただけであります。アーチ・C・クランプは、何故このような提唱をしたのか。彼は、1917年のアトランタの国際大会で、国際ロータリー理事会の決議も得ずに、いきなり大会にアピールする形でこの基金の設定の提案をいたしました。もし、これを事前に理事会にかけておりましたら、おそらく日の目を見なかったらと思うのであります。何故かと言いますと、その理事会には、パスト会長でありましたドクター・アレン・アルバートがいましたし、第2副会長でありました、ガイ・ガンディカーがいたからであります。



彼の思考を分析してみますと、第一次世界大戦で国際奉仕の実践の必要性が高まってきた。しかし、それはテリトリーの遥か彼方で効果が上がるものであります。したがって個人が遥か彼方の戦場まで出て行って、奉仕の実践をするというのは、かなり無理がある。これが第1点。それから第2点は、ロータリー運動は、個人の善意を育てる運動である。一言で言えば、ロータリー運動というのは、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」ただそれだけであります。心は求めるけれども、金を求めることはないのであります。したがって、ロータリークラブには金を集める能力はない。そこでアーチ・C・クランプは考えたのであります。連合会がお金を集めよう、そして受託者になって、それを個人で遥か彼方の戦場に出て行く人たちの個人奉仕に役立てようということでありまして。

それから第3番目には、1917年というのは、ライオンズ国際協会が創立された年でありまして。そこで、ライオンズに出来なくてロータリーに出来るものは一体何か。ロータリーの個人奉仕にはテリトリーの制約がありませんから、個人奉仕であれば自由にどこへ行っても奉仕の実践が出来るわけでありまして。したがっ

て、連合会が浄財をプールして、その金を個人奉仕の実践に使えばよい。それを可能ならしめるのが、この基金だという理論構成を採ったわけでありす。

ところが、当時のロータリーの主流の考え方は、アーチ・C・クランプの考え方を容認しませんでした。その理由の第一は、連合会を作ったのはロータリークラブである。したがって、国際ロータリーにはロータリークラブから金を集める権限はないはずである。国際ロータリーがロータリークラブの権限を侵害することは許されない。したがって、このような事業の企画立案は認められないと言って反対しました。それから、第二に、この連合会に基金の管理を求めたことは一切ない。個々のロータリークラブがロータリークラブ国際連合会に与えた権限は3つだけである。第1に曰く、奉仕理念の提唱。第2に曰く、ロータリーの拡大。第3に曰く、情報の媒介、この3つだけである。金を集める根拠はどこにもないという形で反対をいたしました。

そこで、真っ向から意見が対立してしまいました。この基金の設定の提案が否決されますと、アーチ・C・クランプは赤っ恥をかきます。さればとって、この提案を通すわけにもいかない。一番困ったのが、大会のホストクラブでありましたカンサスシティのロータリークラブであります。「俺たちはこのような原理に反する金を出す気はない。しかし、出さなければ会長が恥をかく。仕方がないから俺たちが人身御供になって金を出そう」と言ってしぶしぶ出したのが26ドル50セントでありました。このようにして、ともかく基金は実在するに至りました。そして1927年まで国際ロータリーの理事会がこれを預かることになったわけでありす。このときに偉かったのがポール・ハリスであります。アーチ・C・クランプにしても悪意でしたわけではございません。したがって、善意で提唱され、そして実在するに至ったものは、その因縁は大事にしよう、というのがポール・ハリスの考え方でありました。ポール・ハリスは、1910年に「ロータリーは寛容の中に宿る」と大悟しましたが、この考え方も、いわゆるロータリー寛容論の一つの現われであります。自分と他人を大きく抱擁して育てていく。これはポール・ハリスが偉大な指導者である所以でありま

す。ポールはこのようにして、その26ドル50セントの基金を守り育てていこうとしたのであります。しかし、金は集まりませんでした。

そこで、1927年に、国際ロータリーの理事会は、アメリカ税法上の免税措置に着眼したのであります。民間の善意の福祉育成のために寄付をしますと税額が控除されるという特例があるのであります。そこで、このアーチ・C・クランプの提唱による基金を、信託制度、即ち、慈善の目的をもってする信託へ組織変更をしようということになったのであります。善意に捧げられた準公共的な資産を管理する制度を信託と言うのであります。このような charitable trust というものを作り上げて、それによって金を集めようとしたのであります。1927年にその準備委員会が作られ、1931年に基本約款が制定され、そしてこのアーチ・C・クランプの基金は、ロータリー財団と呼ばれる信託財産制度による管理を受けることになったのであります。

そこで、免税措置が講じられたから金が集まったかと言うと、金は依然として集まらなかったのであります。当時のロータリアンの言い分は、「金が出しやすいかどうかの問題ではない。金を出すべきかどうかの問題である。俺たちは出すべきではないと考えるから出さないよ。金はたくさんある。しかし、出すべきでないから出さないよ」というのが、当時のロータリアンの一貫した考え方だったわけでありす。

やがて1935年を越えますと、ヨーロッパに暗雲が垂れこめてまいります。ナチズムとファシズムの台頭であります。そこで、ポール・ハリスは、第二次世界大戦を予防し、国際理解と親善のために、ロータリー財団に100万ドルを集めて、若者たちに奨学金を支給して、国際感覚を育成しようと言って、自ら運動の先頭に立ったのであります。しかし、依然として金は集まりませんでした。やがて、第二次世界大戦は核爆弾の開発によって終結し、ポール・ハリスの意志は実らなままに終わってしまったわけでありす。そして、それから2年後の1947年1月27日、ポール・ハリスがこの世を去りました。残されたロータリアンたちは、始祖ポール・ハリスの遺志を継がねばなりません。それは何か。言わずと知れたロータリー運動の国際性であります。これは疑う余地がない。そこで残された

ロータリアンたちが、ロータリー財団に募金を、というスローガンを提唱することになって、ロータリー財団は、一躍国際奉仕の檣舞台にのし上がってくるようになったわけでありす。これが大体の経緯であります。

ただ、一点注意しておかなければならないのは、ポール・ハリス・フェローの勧誘について、ロータリー財団についての正しい理解を覚えておかなければならないことでありす。外国と交流の少ない地方都市では、国際奉仕の実践の機会ほとんどございせん。しかし、一旦ポール・ハリス・フェローになると、これが知らず知らずの間に国際奉仕の実践になるので、お寺で言う永代供養料のように、国際奉仕の一生の仕事が終わるのだから、同じ出すなら1,000ドル出ささいよという勧誘の仕方があります。

しかし、これは誤りでありす。ロータリー財団というのは、比喩的に言えば、R I レベルにおけるニコニコ箱であります。これに金をいくら入れても、社会奉仕の実践が全部済んだことにはなりません。したがって永代供養料にはならないわけでありす。ニコニコ箱は奉仕の実践の側から考えますと、実践を前提とする予備行為なのであります。それ自体実践ではございせん。社会奉仕とか国際奉仕をするときに使ってくれと言ってロータリアンがクラブに寄託した行為に過ぎません。したがって、これとパラレルに考えますと、国際ロータリーの国際理解と親善を目的とする事業に用立ててくれと言って預託した金であります。したがって、金を出すこと自体は奉仕の実践にはなりません。あくまでもこれは予備行為であります。ということになると、ポール・ハリス・フェローを1回出せば永代供養料になるのではなくて、何回でも second round, third round をやっていかなければならないということになるのであります。

このロータリー財団の特徴というものを申し上げておきます。およそ、教育事業を主体とする財団制度というものは、財団所在地に来た人に奨学金を出します。これが原則であります。フンボルト財団は、ドイツに来る若者たちに奨学金を出します。フルブライト委員会やフォード財団も同じであります。ブリティッシュ・カウンスルも同じであります。みな財団所在地

に来た若者たちに奨学金を出すのであります。日本の米山奨学会も、日本に来た若者たちに奨学金を出します。米山奨学会は片貿易だから改めよという意見がありますが、もともと教育事業を主体とする財団というものは片貿易なのであります。

ところが、ロータリー財団だけは違うのであります。ロータリー財団は、地球上の全ての人たちが善意と善意を交換するという国際体験を得てもらうための制度でありますから、どこの国の若者がどこの国へ行っても奨学金を出します。但し、受け取り機関としてのロータリークラブがあることが必要であります。このように素晴らしい独自性を持っているのがロータリー財団なのであります。

それから、ロータリアン個人が、奨学生の世話をすることが出来ます。これは、ロータリーが育てる奉仕と言われていることに合致したやり方でございす。それから、第3番目に元来財団制度というのは、基本元本を固定して、その運用利息で事業を継続していくものであります。米山奨学会も、カール・ミラー財団も同じであります。ところが、ロータリー財団は、基本元本を固定しているゆとりがございせん。したがって、基本元本は3年間だけ固定し、その間の運用利息をもって経費を賄っていきます。そして3年経ったら元本を使ってしまいます。したがって、財団の基本的なあり方とすれば、非常に危険なやり方なのであります。ロータリー財団は、基本元本は使ってしまうけれども、基本元本は全世界のロータリアンである。全世界にロータリアンがいる限り、毎年どこからポール・ハリス・フェローその他の寄付が入ってくる、これが運用利息みたいなものだという非常に柔軟な解釈を採ります。しかし、これは明らかに詭弁であります。しかし、こういう詭弁的な解釈を採らざるを得ぬ事情にあることもまた事実なのであります。したがって、ロータリアンたる者は、ロータリー財団を助けなければならないと思うのであります。寄付は1回きりではなくて、毎年あるいは何年かごとにインタバルを置いて、適度に寄付を続けていかなければ、ロータリー財団はその機能を適切に果たすことが出来ないと思うのであります。

ロータリー財団は、従来、とかく原理的な批判があ

りましたけれども、今は大変素晴らしい仕事をしております。したがって、このような事情を知って、多少なりとも感ずるところのある人は、温かい目をもってロータリー財団を見守ってやっていただきたいと思えますし、ご協力をいただきたいと思うのであります。

## 世界社会奉仕(WCS)について

ロータリー運動の国際性については、もう一つの大きな思想の潮流があります。それは、世界社会奉仕(World Community Service, WCS)の思想の潮流であります。

現在、世界が激しく変動し、一国だけでは生きて行けない実感をひしひしと感ずります。まさに国際化社会であります。

従来は、アメリカを中心とした経済体制、いわゆるアメリカの世界的責任ということで進められてきたのでありますが、1980年代、アメリカとソ連の指導性が失われて信頼を喪失し、第3世界からの発言が強くなってきて、自分達の経済的な生きる権利を主張しました。特定の国だけが利益を受けるのではなく、開発途上国も共に経済的利益のShareを受けなければならぬという宣言をして、世界もこれに同調しなければならぬ動きになってきました。即ち、

1973年、アルジェリアで非同盟諸国首脳者会議が開かれ、政治宣言、経済宣言が行われました。政治宣言というのは、世界の平和というのは、超大国の取引の中にあるのではなくて、平和を願う全ての国々が勝ち取ったものこそ本当の世界の平和であるという宣言であります。これが、やがてベトナムに現れたことをご承知のところであります。それから経済宣言というのは、自分の国から出た資源は自分の国のものである。したがって、その値段は自分の国で付ける、という事であります。このことから、世界の経済秩序が変わったことは周知の事実であります。日本も1974年にオイルショックの洗礼を受けました。

一方、1973年以降の世界の激動の中で、『一つの世界』One World Problemという考え方が世界中に浸透して行きました。これは人口、食糧、公害、平等の問題は、自国だけの問題でなく全世界の問題である。この『一つの世界』の問題を解決しようと言う声がか

れまた第三世界から起こって来ました。かつては、力で押さえることの出来た国連の舞台では大変大きな問題でありました。

このOne World Problemの思考は、換言すると、『世界の問題を考えるときに、一人ひとりの人間を大切に考えて行かねば、世界のことも考えられない』という考え方であります。

実はロータリーは、今日のこのような思考や状況を既に1960年代に予測し、その対応を自覚していたのであります。即ち、1960年代以降、国家社会の対立を前提としないグローバルな世界社会というものの見方から来る奉仕の実践の分野があるのではないかと、という自覚が生まれてまいりました。従来は、国家と国家とが対立する国際社会でありましたが、そのような国家というものを一切捨象して、地域社会の延長線上に世界社会、即ち、地球を一つの地域社会と見る奉仕の実践類型があるのではないかと、という考え方が出てきたのであります。これが世界社会奉仕(WCS)の自覚なのであります。

この自覚が、その2年後の1962年、インドのカルカッタロータリークラブから出ましたR I会長ニティッシュ・ラハリーの提唱になって実を結ぶのであります。『世界中のどこかの片隅に、一人でも不幸な人が居る限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう。Kindle the spark within!』非常に魅力的なターゲットを打ち上げたわけであります。

このターゲットを受けて、その翌年の1963年、カール・ミラーR I会長の年度に『地区提携(Matched district)』ということを実施しました。これは、世界中の地区と地区とが提携することによって、地区内の情報を交換しよう、その事によって世界社会奉仕(WCS)の実践の一つの踏み台にしよう、という計画であります。

そして、やがてその3年後の1966年、リチャード・エヴァンスR I会長の年度に世界社会奉仕(WCS)の実践が具体化されたのであります。

では、この世界社会奉仕(WCS)の思考のそもそもの濫觴は何か?と言いますと、

第二次世界大戦が終結した後、米ソのイデオロギー

あります。果たして警告通り、その20年後にインドとアフリカに大飢饉がやってまいりました。

この対応策として、ブラジルの国際経済学者は、先進国の国民が個人として、自分の責任において開発途上国に行き、その国民に対して、自立心を育成して、何物をも求めずに帰ってくる、即ち個人のVolunteer活動、援助活動乃至奉仕活動が必要であると説いたのであります。

この話は、当時(約40年前)においては、奇異の目をもて見られていたのであります。ところが、ロータリーは世界的な組織でありますから、ブラジルの経済学者がこの提唱をする7~8年前に、既に『平和への七つの道』の中に、この問題に関する一章が出ているのであります。したがって、『平和への七つの道』というのは、ロータリーが実は、世界中の指導的な職業人を人間の善意によって結ぼうというグローバルな活動をしているデータの中から、後にブラジルの国際経済学者が提唱しようとするようなものを先取りするほどの問題意識を国際奉仕の中で持つに至っていたということであり、これは我々ロータリアンの誇りとするところと言わなければならないと思うのであります。

ところで、この話は、当時の国際感覚のないロータリアンや一般の人達には、非常に奇異に聞こえるところがあります。何故なら、第1に、地球全体を一つの共同体と考えるのでありますから、風呂敷が大きすぎます。第2に、その対策として一人の人間が何かをするというのでありますから、話の規模が小さすぎます。

したがって、これは奇妙奇天烈だということで、少なくとも効率を重んずる人達は、この考え方についていくことができないのであります。即ち、地球の問題や外国の問題は、元来、国家の仕事であって、国家は莫大な財力を持ち、武力も機動力も持っている。したがって、このような問題は、個人では何とも出来ない問題であるから国家が面倒を見るべきであると考えるのであります。

しかし、ブラジルの国際経済学者は、『国家では何ともならない。そのところは既に計算済みである』というのであります。何故、国家ではなんともならないのか、と言うと、国が外国を援助するときには、国

の対立によって冷戦による国際緊張が高まって来ました。そこで、1951年に国際ロータリー理事会は、第三次世界大戦を予防するために『世界平和の樹立を目的とする国際奉仕実践の8原則』というものを宣言しました。ただ、この8原則は、若干難解であったので、2年後の1953年にR I理事会は、この8原則を事例をもって解説しました。それが『平和への7つの道』というのであります。

これをロータリーの原則に則って解説しますと、  
第1に、ロータリアンは、自国の諸々の伝統に誇りを持つべきこと。わが国の場合は、日本固有の伝統即ち、文化的、社会的、宗教的、経済的伝統に対して誇りを持つべきこと。  
第2に、自国の伝統に誇りを持つが故に、他国民の伝統に対して優越感をもたざること。  
第3に、謙虚に頭を垂れて他国民の伝統に学ぶ姿勢を持つべきこと。  
第4に、国際社会の中で個人奉仕を実践すべきこと。と要約されるのであります。

何はともあれ、国際ロータリー理事会は、第三次世界大戦が起る緊張が高まるに及んで、その予防の為に誠により原則の提示を行ったのであります。しかし、米ソの両巨頭が共存共栄の原理を自覚することにより第三次世界大戦が回避されたことは既にご承知のところであります。ところが、ここに、従来とは別の重大問題が起って来たのであります。

それは、今から約40年前のブラジルの国際経済学者の警告でありました。それは、地球上の富の75%は、僅か25%の先進国の富める民族の独占するところとなっている。残りの富の25%は、75%の開発途上国の貧しい民族にしか分かち与えられていない。少数の民族が地球上の富を殆ど独占し、他の民族は赤貧洗うが如き生活を余儀なくされている。更に問題は、開発途上国の人口の増加率は、目に余るものがある。事態がこのようにして推移すれば、開発途上国の人口が急増し、これらの人達を生かすために、先進国が食糧の増産効率をどんなに上げてても、20年後には地球上に大飢饉がやってきて、先進国の繁栄を永続化することは出来なくなる。これは、開発途上国の民族の墮落の結果であるとして決着がつかない問題である、というので

民の血税をプールした公共財源を使いますから、国益に適うやり方で使わなければならない。つまり、損するような形で金は使えない。したがって、例えば、開発途上国に2億ドルの借款を設定した場合でも、必ず利益があがるようになっていなければならない。何故なら、借款を設定して相手国でダム工事や道路建設をする場合、その工事を請負うのは日本の建設会社でありますから、その会社が相手国の金を全部もらって戻ってくる。それから海外における市場を確保する。このような利益を計算しなければ、国は絶対に外国を援助すべきではないし、また、援助できる筋合いのこともないのであります。したがって、国というものは、損するような形で金を使うことは絶対にできない。したがって、国家では何ともならないのであります。

それから、国の援助というものは、必ず紐付きであります。援助を受けた国はそれによって、かなりのものを失う事を覚悟しなければならない。その最たるものが、ビアフラ戦争であります。今から約30年前にビアフラで内乱が起きました。反乱軍と政府軍とをそれぞれ超大国が援助して戦争を遂行し、最後の最後まで戦って政府が倒れ、内乱は成功したのでありますが、大変な飢餓がやってきて300万人が餓死したという事実があります。これは一体何を意味するか、というと、ブラジルの国際経済学者が指摘するように、国の援助というものは、貧富の格差の存在を前提とする南北問題では有害無益であるということになります。したがって、先進国の国民が自分の責任において、開発途上国に行って自分の専門の小さな分野でよいから、彼等とスクラムを組んで効果が上がったら、何物も求めずに引き上げてくるというボランティア活動が必要となるのであります。

このブラジルの学者の考えはロータリーの真髓に関する問題であります。ロータリーは、どんなに地球が大きくても、人類社会の基本は個人である、と考えるのであります。一人ひとりの自覚が基本である。ひたすら、自分の内なるパーソナリティを高めて行く。そして、他人にもそれを慈<sup>しやう</sup>憑<sup>よう</sup>する。一人ひとりの規模を大きくして、それらの心の通い合いをもって社会改良を目指すということをロータリーは説こうとしているのであります。

実は、このテーマを純理論として図式化してみると、ロータリーの真髓である個人奉仕の実践にピッタリと合うのであります。

まず、この思考は、1962年にラハリー R I 会長が提唱し、1966年にエヴァンス会長が実践に具体化した世界社会奉仕という思考とピッタリ合ってくるのであります。即ち、

第1に、地球をひとつの地域社会と考えよう、これをロータリークラブのテリトリーと考えよう、というのであります。したがって、世界社会奉仕というのは、国際奉仕というよりは社会奉仕であります。

第2に、地球を一つの地域社会と考えるときに、そこに貧富の格差からする Community needs というものが存在する。

第3に、その Community needs に対して個人奉仕をもってその needs を解決しなければならない、ということになります。

そこで決議23-34号を見ると、まず社会の needs を調べること、needs に対して適切な奉仕の供給をすること、そして、その真髓は個人奉仕でなければならない、クラブが事業計画を組むもの、即ち団体奉仕については例外的なものである、このように集約することができます。そうすると、まさにこれはロータリアンが取り組まなければならない問題だということになるのであります。

そこでこれについては準備作業がいくつかなされました。

まず、1963年カール・ミラー会長のときに、全世界のロータリークラブがそれぞれの地域状況をよく心得ているから、国際ロータリーが仲人になって、ロータリークラブ同士がお互いに情報交換をすることで、やがて、世界社会奉仕の実験をしようということになりました。

数名のバスターガバナーを選んで、この人達が R I の委嘱を受けて、それぞれ南北問題の一つの問題を解決するために地球上のそれぞれの地域に派遣されたのであります。或るバスターガバナーは、南米のホンジュラスで農業用灌漑の技術を教え、或るバスターガバナーは

初等教育の問題を担当しました。日本からは姫路の齋木亀治郎バスターガバナーが、インドのデリーへ行って6週間の小企業研修を実施しました。齋木さんは日本人ロータリアンで世界社会奉仕に参加した只一人のロータリアンであり、この時の経験をもとにして『ミスターほてい』という著書を変な美しい文章で書いておられるのであります。

ところで、国際ロータリーは、このようにして一年間の結果を集約してみたところ、国際ロータリー理事会の期待にも拘らず、結果は明らかに失敗でありました。

何故失敗したのか？ まず第一に、参加した人達の心構えの問題であります。先進国の人が開発途上国の人達に慈悲心をもって臨んだのではないかと、また、同じ目の高さで臨まなかったのではないかと。これらによって相手方の反感を招いたのではないかとということが考えられます。国際社会の中では、自分の内なる善意が必ずしも相手方に通じない事があるのであります。

第二に、言語の障害があります。こちらが善意で話したことが相手方が悪意で受け取る場合があります。

第三に、風俗習慣や物の考え方の相違があります。国際社会では自分と異なる文化を受け入れる度量も大切であります。

いずれに致しましても、国際ロータリーは、この実験に失敗したために、当初の個人奉仕・労務奉仕を中核とする世界社会奉仕から一歩後退して、団体奉仕、金銭奉仕を主軸とする世界社会奉仕へと純度を下げたのであります。但し、R I の仲人機能 (LIBRARY) は使おうということになったのであります。これが1966年度にエヴァンス会長が世界社会奉仕の実践に具体化した時に付け加えた一つの要素でありました。

ところが、本来の世界社会奉仕 (個人奉仕) の純度を下げたために、貧富の格差は正を目的とする実践の分野では、世界社会奉仕と国際奉仕との類型上の区別ができなくなってしまったのであります。例えば、フィリピンで水害のために米が不足した。日本のロータリークラブが直接相手方クラブに米を送ると国際奉仕となるが、R I のライブラリーを使って米を相手方に送ると世界社会奉仕になるのであります。しかし、米

を送った量も、送り主も受取人も全く同じでありながら、実践の方法によって国際奉仕となったり世界社会奉仕となったりして、この両者を区別することはできなくなったのであります。

これは結局、世界社会奉仕の考え方の純度が下がったことに原因があるのであります。

世界社会奉仕について、もう一点注意しなければならないことは、ロータリーの個人奉仕であります。これは、社会奉仕・職業奉仕・国際奉仕のすべての場合について、因縁が熟しないと実践ができません。ところで、個人奉仕を中核とする世界社会奉仕というものは、私達にとって、未だ因縁が熟していないのであります。したがって、開発途上国へ行こうと思っても行くことができないから実践ができません。しかし、これを恥ずかしいと思う必要はないのであります。因縁の熟したもから実践すればよいのであります。

ただ、地球は広いから因縁の熟した人達もいます。例えば、オーストラリアのロータリアンが、3カ月の有給休暇を利用して、バブアニューギニアに行き、医療救済をしているカトリックの神父の病院を修理して帰って来るといような活動をしています。

こういう種類の活動を国家的活動に高めたのが F A I M (Fourth Avenue In Motion) という運動であります。ただ単にロータリアンがこの運動に対して金を出さずだけではなくて、ロータリアンの活動に対して国民がその価値を認識して、ここに金をプールするようになり、個人が様々に活動しだしたのであります。

ところで、私達には未だ因縁が熟していません。しかし、やがて因縁が熟することは間違いないと思われれます。したがって、私達にとって世界社会奉仕というものは、やはり近い将来の夢の実現の世界だと思っております。世界社会奉仕は、現代の国際ロータリーの夢のあるところでもあります。因縁の熟する機会は突如として来るかも知れないので、私達は心の準備をして待つだけの腹構えが必要であると思っております。

最後に、今までの説明で明らかなように、世界社会奉仕は、ロータリーの悲願であり、社会奉仕の嫡流であります。国際奉仕は、原理的にはむしろ亜流に属するものであることを申し添えて話を終わりたいと思います。御静聴ありがとうございました。